

15章、16章

テーマ: アブシャロム、ダビデに対して謀反を起こす。

アブシャロム、ダビデに対して謀反を起こす

とんでもない罪を犯したあと、ダビデは、トラブルがひっきりなしにどんどんやってくることに気づきました。彼が罪を犯したのと同じような仕方で、家族が罪を犯し、その影響は続きます。神さまは本当にダビデをまき小屋に連れて行かれました。

この章では、アブシャロムがダビデに対して謀反を起こします。とても狡猾な方法で、アブシャロムはイスラエルの子らの心を盗み始めます。彼は魅力的な若者でした。おそらく、多くの点でダビデに似ていたことでしょう。彼は見たところ、王座の相続者です。つまり、ダビデは彼に後を継いでもらいたいのです。今、アブシャロムはエルサレムに戻って、ダビデの転覆をひそかに企み始めています。これは卑怯な行いですが、ダビデのしたことが彼自身にはね返りつつあるのです。実際、恐るべき革命が勃発し、ダビデはエルサレムから逃亡することになります。

(II サムエル記 15:1-2)「その後、アブシャロムは自分のために戦車と馬、それに自分の前を走る者五十人を手に入れた。アブシャロムはいつも、朝早く、門に通じる道のそばに立っていた。さばきのために王のところに来て訴えようとする者があると、アブシャロムは、そのひとりひとりを呼んで言っていた。『あなたはどこの町の者か。』その人が、『このしもべはイスラエルのこれこれの部族の者です』と答えると、アブシャロムは町の一番にぎやかな門のところに立っていました。不満のある人々が、正義を求めて門のところに来たとき、彼は大きな同情を示して彼らの話を聞きました。

(II サムエル記 15:3-4)「アブシャロムは彼に、『ご覧。あなたの訴えはよいし、正しい。だが、王の側にはあなたのことを聞いてくれる者はいない』と言い、さらにアブシャロムは、『ああ、だれかが私をこの国のさばきつかさに立ててくれたら、訴えや申し立てのある人がみな、私のところに来て、私がその訴えを正しくさばくのだが』と言っていた。」

アブシャロムは悪い子でしたが、優秀な政治家でした。彼は頭が良く、不正で、狡猾で、悪賢かったのです。

(II サムエル記 15:5-6)「人が彼に近づいて、あいさつしようとする、彼は手を差し伸べて、その人を抱き、口づけをした。アブシャロムは、さばきのために王のところに来るすべてのイスラエル人にこのようにした。こうしてアブシャロムはイスラエル人の心を盗んだ。」

アブシャロムは本物の政治家だと思いませんか？ 今日多くの人たちが当選するのも、この方法です。彼らには、握手と背中をポンポンとたたくのが上手なこと意外には、何の資格もありません。今日、この手法を使う説教者も大ぜいいます。彼らは説教も、教えることもできませんが、背中をたたくことだけは上手です。不幸なことに、まさにそのことが私たちにとって、魅力的なのです。

神さまのみことばから私が言えることは、反キリストが力を持つのも、その方法だということです。反キリストは、この世で今まで一番のなれなれしい背中たたき屋になることでしょう。

さて、アブシャロムは背中たたきが上手でした。彼は門のところに立って言いました。

「ああ、私がさばきつかさだったなら！ そうすればあなたは“正義”を受けられるだろうに。」

そのようなことばがアピールすることは理解することができでしょう。アブシャロムは、

「もしあなたが私に投票してくださるなら、あなたの問題はすべて解決してさしあげます。私は国内外のすべての社会問題を処理しますよ。」

と言っていたのです。それは今日の政治家たちも言っていることです。不幸なことに、私たちは彼らに耳を傾け、彼らを信じ、彼らに投票します。そして彼らが当選すると、彼らは実を結ばないのです。

もちろんアブシャロムは、父ダビデに対する謀反を準備しています。この、ダビデの家の中での謀反は、とんでもないことです。

(II サムエル記15:7-8)「それから四年たって、アブシャロムは王に言った。『私が【主】に立てた誓願を果たすために、どうか私をヘブロンへ行かせてください。このしもべは、アラムのゲシュルにいたときに、「もし【主】が、私をほんとうにエルサレムに連れ帰ってくださるなら、私は【主】に仕えます」と言って誓願を立てたのです。』」

彼の願いはちょっと変わっているように見えます。彼は、自分が亡命していたときに立てた請願を果たしに、南のヘブロンへ行かせてくださいというのです。でも、彼は亡命していたときには、北のシリヤにいたのです。でも、ダビデはそのことを訊ねません。

(II サムエル記15:9-10)「王が、『元気で行って来なさい』と言ったので、彼は立って、ヘブロンへ行った。そのとき、アブシャロムはイスラエルの全部族に、ひそかに使いを送って言った。『角笛の鳴るのを聞いたら、「アブシャロムがヘブロンで王になった」と言いなさい。』」

ヘブロンは、ダビデが統治を始めた場所であることを思い出されるでしょう。ダビデは、ヘブロンで7年間ユダの王でした。明らかにアブシャロムは、請願を果たしにヘブロンに行ったのではありませんでした。彼がそこに行ったのは謀反を始めるためでした。

(II サムエル記15:11)「アブシャロムは二百人の人々を連れてエルサレムを出て行った。その人たちはただ単に、招かれて行った者たちで、何も知らなかった。」

言い換えれば、これらの人々はアブシャロムと一緒に行きはしましたが、ダビデに対して謀反が準備されているとは、知らなかったのです。

(II サムエル記15:12)「アブシャロムは、いけにえをささげている間に、人をやって、ダビデの議官をしているギロ人アヒトフェルを、彼の町ギロから呼び寄せた。この謀反は根強く、アブシャロムにくみする民が多くなった。」

この謀反は、勢いを増しています。雪だるま式に増えていって、間もなく、アブシャロムにくみする者たちが多くなりました。ダビデの議官のアヒトフェルでさえも、このすべての片棒を担いでいます。ダビデが、実際に何が起きているかを自覚する前に、謀反が表面化します。

ダビデ、逃げる

(II サムエル記15:13-14)「ダビデのところに告げる者が来て、『イスラエル人の心はアブシャロムになびいています』と言った。そこでダビデはエルサレムにいる自分の家来全部に言った。『さあ、逃げよう。そうでないと、アブシャロムからのがれる者はなくなるだろう。すぐ出発しよう。彼がすばやく追いついて、私たちに害を加え、剣の刃でこの町を打つといけないから。』」

ダビデはエルサレムから逃げます。ここで質問が出て来ます。

「なぜダビデは逃げたのでしょうか？」

ダビデはエルサレムの町を愛していました。なぜ、町にとどまって戦わなかったのでしょうか？ダビデは自分の罪のゆえに、神さまが自分を罰しておられることを知っていたのだと、私は確信しています。私が、それを真実だと知っているのは、II サムエル記15:25-26に基づいています。そこにはこう書かれています。

(II サムエル記15:25-26)「王はツアドクに言った。『神の箱を町に戻しなさい。もし、私が【主】の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいとを見せてくださろう。もし主が、「あなたはわたしの心にかなわない」と言われるなら、どうか、この私に主が良いと思われることをしてくださるようになさい。』」

ダビデは自分に何が起きているのかを知っていました。彼は、さばきが神さまから来ていることを知っていたのです。

II サムエル記13章で、アムノンがタマルに対して犯罪を犯したことは覚えておられるでしょう。ダビデはとんでもないことが起こって、恥辱を負いました。このスキャンダルはエルサレムで起こりました。ウリヤとバ

テシェバを巻き込んだダビデの大きな罪も、エルサレムで起こったことを思い出されるでしょう。そのときダビデは、自分の軍隊と一緒に戦っているべきだったのです。ダビデは、神さまが自分を罰しておられることを知っていたことと、また、自分が建てて愛した町が戦場になるのを見たくなかったのとで、今回はエルサレムを去って行きます。II サムエル記15:30には、こう書かれています

(II サムエル記15:30)「ダビデはオリーブ山の坂を登った。彼は泣きながら登り、その頭をおおい、はだして登った。彼といっしょにいた民もみな、頭をおおい、泣きながら登った。」

ダビデはエルサレムを愛しました。彼はそのエルサレムが戦場にはなあって欲しくなかったのです。でも、この町は他のどの町よりも破壊されるのです。それは、この町の反抗と罪のためです。

ダビデがエルサレムから逃げたのは、同時に、この問題についてアブシャロムを追求する準備ができていなかったからです。次の章で見ますが、ダビデの心は、自分の息子のいのちを助けたかったのです。彼に危害が及んで欲しくなかったのです。私は、ダビデが地上のだれよりもアブシャロムを愛していたのではないかと思います。エルサレムを離れることは、ダビデを容易ならぬ危険にさらしますが、彼にとってはそれは別に新しいことではありません。彼は何度も大きな危険の中にいたことがあるのです。ダビデは自分のいのちよりも、自分と神さま、そして自分と息子の関係のほうをもっと心配しています。

この背景を念頭において、今起こっている謀反を見てみましょう。

(II サムエル記15:19-20)「王はガテ人イタイに言った。『どうして、あなたもわれわれといっしょに行くのか。戻って、あの王のところにとどまりなさい。あなたは外国人で、それに、あなたは、自分の国からの亡命者なのだから。あなたは、きのう来たばかりなのに、きょう、あなたをわれわれといっしょにさまよわせるに忍びない。私はこれから、あてどもなく旅を続けるのだから。あなたはあなたの同胞を連れて戻りなさい。恵みとまことが、あなたとともにあるように。』」

イタイはペリシテのガテの出身で、のちにダビデがヨアブとアビシャイと一緒に司令官に任命しているところを見ると、おそらく自分の国でも将軍だったのでしょう。彼はダビデに対して大きな忠誠心を抱いていたので、彼と彼の家族全員がダビデと一緒に亡命すると言い張りしました。

(II サムエル記15:21-23)「イタイは王に答えて言った。『【主】の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。』ダビデはイタイに言った。『それでは来なさい。』こうしてガテ人イタイは、彼の部下全部と、いっしょにいた子どもたち全部とを連れて、進んだ。この民がみな進んで行くとき、国中は大きな声をあげて泣いた。王はキデロン川を渡り、この民もみな、荒野のほうへ渡って行った。」

ダビデには、忠実に従って来る人たちが大ぜいいました。ダビデのためなら、すすんでいのちを投げ出す多くの男たちがいたのです。

契約の箱がエルサレムに戻される

(II サムエル記15:24-25)「ツアドクも、すべてのレビ人といっしょに、神の契約の箱をかついでいたが、神の箱をそこに降ろした。エブヤタルも来て、民が全部、町から出て行ってしまふまでいた。王はツアドクに言った。『神の箱を町に戻しなさい。もし、私が【主】の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいとを見せてくださる。』」

ダビデは神さまの契約の箱をその置き場所であるエルサレムに送り返しました。ダビデは自分に起こっていることが、神さまのさばきであることを自覚していたのです。町を出ると、ダビデは泣きながらオリーブ山に向かいました。

(II サムエル記15:31)「ダビデは、『アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している』という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。『【主】よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。』アヒトフェルは、ダビデの議官(相談役)でとても尊敬されていました。アヒトフェルが離反してアブシャロムの側についたとき、ダビデはアブシャロムに対する彼の助言が愚かなものになるようにと祈りました。ちなみに、

神さまはこの祈りに答えてくださいました。ダビデはアブシャロムのうえに神さまのさばきがあるようにとは祈っていないことに注目してください。

フシャイ、送り返される

(II サムエル記15:32-33)「ダビデが、神を礼拝する場所になっていた山の頂に来た、ちょうどその時、アルキ人フシャイが上着を裂き、頭に土をかぶってダビデに会いに来た。ダビデは彼に言った。『もしあなたが、私といっしょに行くなら、あなたは私の重荷になる。』」

フシャイは老齢で、より多くの世話を必要としたのかもしれませんが。

(II サムエル記15:34-37)「『しかしもし、あなたが町に戻って、アブシャロムに、「王よ。私はあなたのしもべになります。これまであなたの父上のしもべであったように、今、私はあなたのしもべになります」と言うなら、あなたは、私のために、アヒトフェルの助言を打ちこわすことになる。あそこには祭司のツアドクとエブヤタルも、あなたといっしょにいるではないか。あなたは王の家から聞くことは何でも、祭司のツアドクとエブヤタルに告げなければならない。それにあそこには、彼らのふたりの息子、ツアドクの子アヒマアツとエブヤタルの子ヨナタンがいる。彼らをよこして、あなたがたが聞いたことを残らず私に伝えてくれ。』それで、ダビデの友フシャイは町へ帰った。そのころ、アブシャロムもエルサレムに着いた。」

アヒトフェルがアブシャロムに寝返ったと聞いたとき、ダビデはフシャイがアブシャロムのところに行き、今は危険な敵となったアヒトフェルの助言を打ち負かすように仕向けます。フシャイはダビデの友であり、ダビデのためにスパイとなる危険を犯すのです。

メフィボシェテのしもべ、ツィバがダビデを欺く

(II サムエル記16:1-2)「ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテのしもべツィバが王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。王はツィバに尋ねた。『これらは何のためか。』ツィバは答えた。『二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるため、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。』」

メフィボシェテは、ヨナタンの足が不自由な息子でした。ダビデはヨナタンへの大きな愛のために、メフィボシェテを世話していました。

メフィボシェテのしもべツィバは、ダビデの家の内部の争いは、サウルの家がもう一度王位を取り戻すチャンスであると考えました。メフィボシェテは唯一の王位継承者でした。作り話をすることで、ツィバはメフィボシェテの所有地のいくらかでも自分のものになることを望んでいました。事実を確かめるチャンスのないまま、ダビデは性急にメフィボシェテのものであった土地をツィバに与えます。

シムイ、ダビデを呪う

(II サムエル記16:5-8)「ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。シムイはのろってこう言った。『出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。【主】がサウルの家のすべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。【主】はおまえの息子アブシャロムの手に王位を渡した。今、おまえはわざわざ会いに来たのだ。おまえは血まみれの男だから。』」

シムイがダビデに言ったことの中には、いくらかの真理がありました。ダビデは血まみれの男であり、彼の上にさばきがくだっているのです。そのことに疑問の余地はありません。

(II サムエル記16:9)「すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。『この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。』」

ダビデの部下のひとり、アビシャイは、この男の口を永遠に封じようとしていました。

シムイが言ったことに対するダビデの反応を見てください。

(II サムエル記16:10-11)「王は言った。『ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かわりのないことだ。彼がのろうのは、【主】が彼に、「ダビデをのろえ」と言われたからだ。だれが彼に、「おまえはどうしてこういうことをするのだ」と言えようか。』」ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。『見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。【主】が彼に命じられたのだから。』」

ダビデはこう言っていました。

「わたしはこのよそ者が私をのろっても、何とも思わない。彼に復讐をしたくはないのだ。私の身に起こっているのは、神さまのさばきだ。私の心を動揺させるのは、私に対する謀反を率いているのが、私自身の息子、アブシャロムだということだ。」

私たちはダビデがエルサレムから逃れるのにここまでついて来ましたが、今、フシャイと一緒にエルサレムに戻って、彼がアブシャロムに仕えようとするところを見てみましょう。

(II サムエル記16:15-17)「アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムに入った。アヒトフェルもいっしょであった。ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。『王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。』」アブシャロムはフシャイに言った。『これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。』」アブシャロムは、この父の信頼を受けた父の友が、彼と一緒に亡命しなかったことに驚いています。

(II サムエル記16:18-19)「フシャイはアブシャロムに答えた。『いいえ、【主】と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。』」

フシャイは、神さまと民が選んだ人物こそ自分の主人だと言っていますが、彼は密かにダビデのためにスパイとなることを計画しています。

(II サムエル記16:20-22)「それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。『あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。』」アヒトフェルはアブシャロムに言った。『父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにお入りください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞いたら、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。』」こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそばめたちのところに入った。」

アヒトフェルは、アブシャロムに忌まわしいことをするように助言しますが、このことはイスラエルにとって、大きな意義のあることでした。アブシャロムの行動は、ダビデの権利は終わり、ダビデが持っていたすべての物は今、ダビデの息子に属するのだ、という粗暴で無礼な宣言だったのです。